

1-6 三次産業従事者の割合

(1) 指標選定の考え方

- 就業分野の変化を把握する。
- 「新雇用戦略について」において、「多様な就業による生きがい対策の推進」が掲げられている。

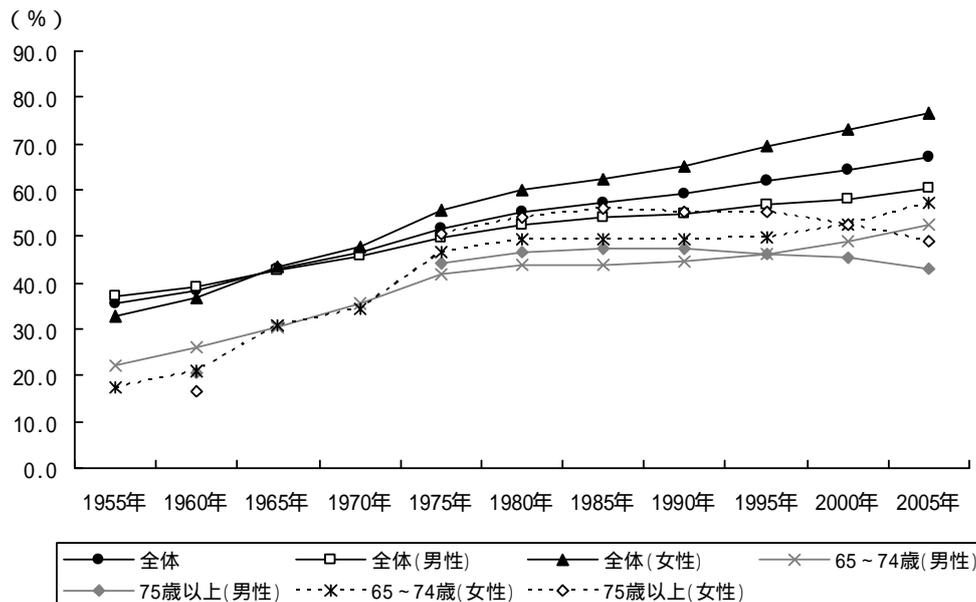
(2) 分析対象データについて

- 「国勢調査」(総務省)より1955年、1960年、1965年、1970年、1975年、1980年、1985年、1990年、1995年、2000年、2005年の11時点の年齢(5歳階級)別「電気・ガス・熱供給・水道業」、「情報通信業」、「運輸業」、「卸売・小売業」、「金融・保険業」、「不動産業」、「飲食店、宿泊業」、「医療、福祉」、「教育、学習支援業」、「複合サービス事業」、「サービス業(他に分類されないもの)」、「公務(他に分類されないもの)」就業者数の合算を、「年齢(5歳階級)別就業者数」で除した割合を使用した。
- なお、本データに関しては、以下の点に留意が必要である。
 - ✓ 分母となる数値に就業者数を用いていること
 - ✓ 外国人が含まれること
 - ✓ 実数と抽出の両方がある場合は、実数を優先して指標の抽出を行っていること

(3) 分析対象データの傾向について

- 全体では、三次産業従業者の割合は一貫して増加傾向にある。
- 男女ともに増加傾向にあるが、1975年以降男性については伸びが緩やかになっている、一方で女性については近年においても増加を続けている。
- 年齢別に見ると、75歳以上(男女)の高齢者については減少しているものの、65~74歳(男女)の高齢者については増加を続けている。

図表 三次産業従業者の割合



出典) 総務省「国勢調査」(各年)

(4)分析結果

- **時代効果**:時代の経過と共に三次産業従業者数は増加している。特に、女性は男性に比べてその傾向が強い。

[考察]

- ✓ 三次産業が近年になって急速に発展したことが影響していると思われる。
- ✓ 一次産業、二次産業から三次産業へ就業がシフトしており、パート・アルバイト、派遣労働者の増加（指標 1-4）も背景に、特に女性の就業先として、三次産業の人気の高まっていることが影響していると思われる。

- **年齢効果**:男女ともに傾向は似ており、70代まで年齢が高くなるにつれて減少していく。女性は男性に比べてその傾向が強い。

[考察]

- ✓ 特に20～30歳代の女性の三次産業従業者数が多くなっているのは、学生時期のアルバイト等で働く人が多いことが影響していると考えられる。
- ✓ 60歳以上については定年によって年齢と共に減少していると考えられる。

- **世代効果**:男女ともに1920年生まれ以降増加し、1960年生まれ周辺から1970年生まれ周辺まではほぼ横ばいで推移し、その後は再び増加に転じている。女性は男性に比べてその傾向が強い。

[考察]

- ✓ 近年の三次産業の発展（サービス化）が影響していると考えられる。

- **交互作用**:男女とも、1995年当初は40代で見られた山が徐々に高年齢にシフトし、2005年時点では60代半ばに移動している。

[考察]

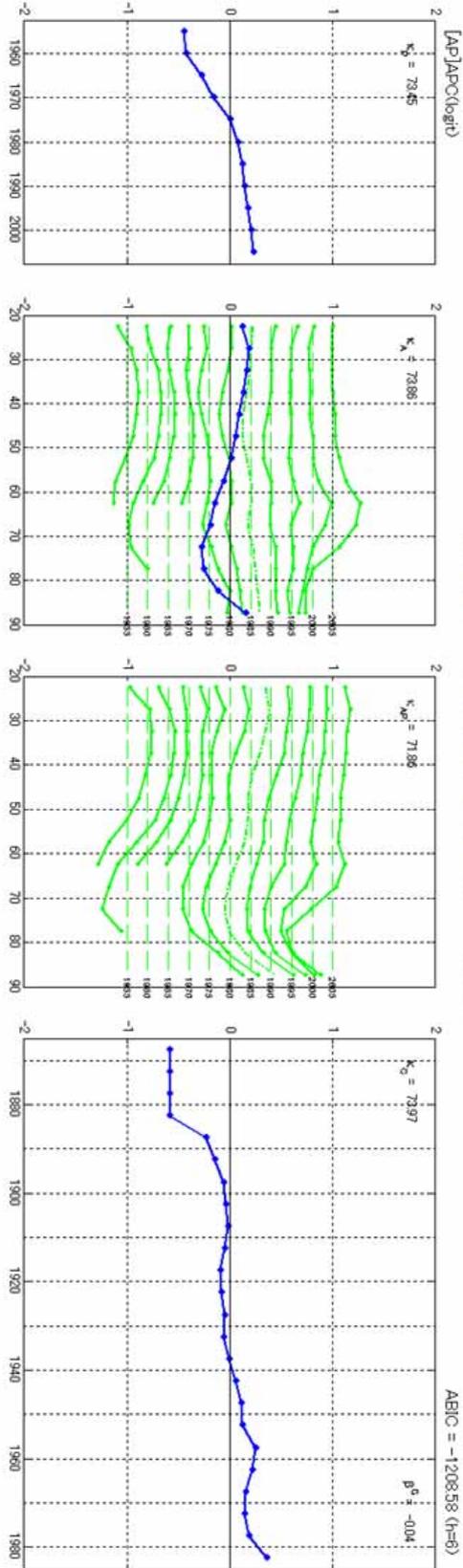
- ✓ 60歳代前半～半ばにかけて三次産業従業者数が増えている理由としては、就労形態の多様化を背景に、定年退職後にサービス業への職種転換が起こっていると思われる。
- ✓ 女性についてはM字カーブが緩やかになってきている傾向が見られることから、働き続ける環境が整ってきていると思われる。

(5)今後の展望

- 全体の長期トレンドとしては、産業のサービス化の傾向が緩やかに続いていくと考えられる。
- 今後10年の間に高齢者（65歳以上）となる1940年代半ば～1950年代半ばの生まれの世代についても、男女ともに三次産業従業者数の割合は増加していき、特に女性の三次産業従業者数は男性以上の伸び率で増えていくことが考えられる。

(6) コーホート分析結果表

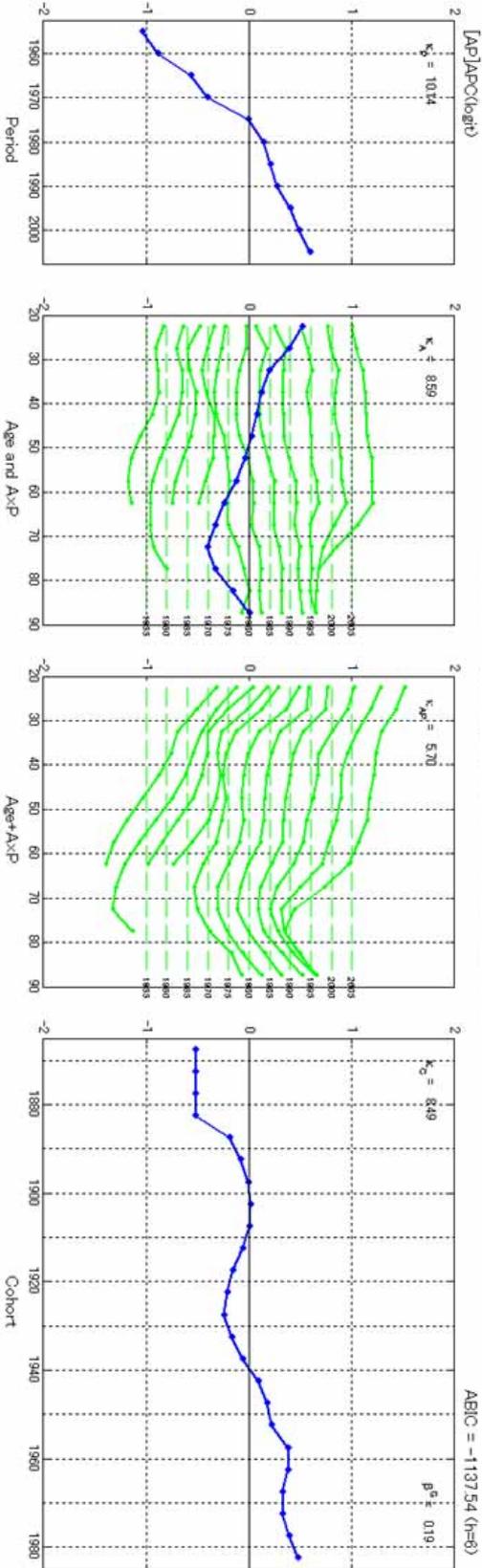
1-6 三次産業従事者の割合 (男性)



ABIC = -1208.58 (t=6)

$\beta^0 = -0.04$

1-6 三次産業従事者の割合 (女性)



ABIC = -1137.54 (t=6)

$\beta^0 = 0.19$